

男子の義胆堅きこと鉄に似たりぎ たん か た くるがね

細野 哲弘

独立行政法人 石油天然ガス金属鉱物資源機構 理事長
(元 特許庁長官 元資源エネルギー庁長官)

「徳川幕府の末路いゑどと雖も、その執政諸有司中あえて人材無きにあらざりき。(中略)一概に幕府を挙げて悉く衆愚の府みなと見做し、その行為けんせきみな国家を誤り日本に禍ごうして、以もつてついに朝廷の譴責けんせきを蒙り滅亡したるものなりと論断するが如きは浅膚せんぷの見なるのみ。」

これは、福地桜痴いゑど(源一郎)の「幕末政治家」という本の冒頭(叙言)である。彼は、幕末に長崎の医者いしやくの家に生まれ、蘭学を学んで外国奉行配下の幕府御家人、旗本となるも、開国の持論が受け入れられず、その後明治にかけてジャーナリストに転じ、劇作家などとしても活躍した。筆者はこれまで数稿に亘り、歴史の表舞台からは忘れ去られているが、国を想い筋の通った気概の人生を処した人物を追ってきた。本稿は、まさに「幕府執政諸有司にあつて立派に国を支えてきた人材」の何人かつづきを、その延長で、紹介しようとするものである。

中学校の社会科の教科書で徳川時代の三大改革として、将軍吉宗の享保の改革、松平定信の寛政の改革、水野忠邦の天保の改革というのを学んだ覚えがある。各々の時代背景において一定の「改革」を目指したものであるが、それを言うなら水野忠邦のあとの阿部正弘の「改革」ももっと注目して良いと思う。もっとも、阿部以降の時代は国際問題が頻発し、鎖国時代のそれとは異なる次元で幕政の根本を揺るがす大激動期であり、否応なく大きな変革が求められた時期であることを思えば、幕末の改革をそれまでの時期のそれとは並べて論じないというのは一つの見識であるかもしれない。

但し、「幕末」というエポックの始まりの捉え方については、先の教科書の記述に戻ると、ペリー来訪から書き起こすのが常識のように感じられるよう



幕末における列強の来航

が、列強の来訪というものはもっと以前からある。

江戸に近い所（浦賀）で庶民にも分かりやすい形で国の危機を覚醒させたペリー来航を特筆するのはともかく、それから何十年も前から国家の危機として外国船の往来とその圧力は、国防意識の高い人々にはひしひしと認識されてきていた。前頁の図は当時の外国船の来訪及び我が国の関連対応策であるが、その危機感の一部の人に留まり、一連の幕府の対応は小出しの「ぶらかし」と称する時間稼ぎ策ディレインクタクティクスを弄ろうしているとの印象を免れない。しかし、二回目のペリー来訪で、愈々切羽詰まったからには、「祖法＝鎖国」という一語で思考を停止するに馴れ、「ぶらかし」以外に策の出ない旧来の幕閣の体制では、時代対応は到底及びもつかなかった。

従って、この時期の指導者及びその体制のなすべき改革の要諦ポイントは、開国の断行とそのための人材を旧

例に拘わらず広汎に登用することであった。時の指導者は老中首座阿部伊勢守正弘¹⁾。彼は、衆智を集めるため、諸藩士を含め²⁾ 学識があり外交事情に通じた者を広く集め、「海防局」なる組織を立ち上げ、有為の士を海防掛とした。

本稿で取り上げるのは、その阿部に見出され、海防局の目付³⁾ として活躍した岩瀬肥後守忠震と水野筑後守忠徳。この二人にスポットライトするのは、開国という未曾有の事業とそれに伴う未経験の実務を、新進の官僚として敢然と取り仕切った群像⁴⁾ の代表的存在であるからである。

まず、岩瀬肥後守忠震である。彼は、奥三河を領した新城設楽氏の8代目設楽貞丈しんしろの三男で、22歳で旗本岩瀬家の婿養子となり、その家督を継いだ（800石）。のちに鷗所と号した。家督は継いだものの長らく部屋住みの身であったところ、31歳の時召しだされて西丸小姓番士となる。かねて成績優秀ほまれの誉高



阿部正弘像
(ウィキペディアより)



岩瀬忠震像(ウィキペディアより 岩瀬の写真は日英通商修好条約交渉の際に英国側の使節が写したものが唯一残っているが、残念ながら鮮明でない。ここでは、土屋禿木が描いたとされる肖像画を掲げた。)



岩瀬忠震銅像(愛知県新城市 設楽原歴史資料館：設楽原はいわゆる長篠の合戦のあった場所であり、展示は武田—織田・徳川の合戦模様を中心。忠震はもともとこの地の設楽一族の出身であり、陣屋のあった竹廣の地に歴史資料館が設立された折、正面玄関前に像が置かれた。建立に当たっては、郷党有志の発意で、土屋禿木の肖像画や親族からの聞き取りをもとに中村晋也氏(日本芸術院会員)が風貌をイメージして彫塑したものと資料館で伺った。)

- 1) 阿部正弘は、備後福山藩主阿部正精の五男。病弱な兄に家督を譲られ当主となる。25歳で老中となり、外国船が頻繁に訪れる激動の時期の幕政を担当。開明派で多くの改革に着手するも、激務のため老中在籍のまま39歳で急死。開国政策を進めながら、急進的な攘夷派である水戸藩の徳川斉昭に海防参与を委嘱したことを政策位置のブレ、迷いと見る見方もあるが、革新的な政策変更を進める過程での幕府内のある種のバランスを考慮した結果と思われる。
- 2) 多くの知恵を集めるためとはいえ、外様の大名、陪臣(その家臣)らを幕政に参画させるということは、当時としては画期的であった。これがため、幕府の威信が低下し、薩長などの台頭を許したとの批判があるが、本末転倒であろう。もはや旧弊墨守では立ちゆかない状況であった。
- 3) 目付というのは、本来旗本、御家人の監視や、諸役人の勤怠などを監察する役職だが、政務一般に関する吟味差配も行った。したがって、有能な人物が任命され、後に奉行職に昇進するものが多かったし、町奉行の就任には目付を経験していることが必須であった。老中が政策を実行する際も、目付の同意が無ければ実際には実行不可能であり、將軍や老中に不同意の理由を述べる事すらできた。よって、その権能は「その人を得ると得ざるとは一世の盛衰に関する(栗本鋤雲著「出鱈目草紙」)」と評されるほどのものであった。
- 4) この時、阿部によって抜擢された若い群像には、ほかに永井尚志(なのおむね)、堀利熙(としひろ)、大久保忠寛、筒井政憲、戸田氏栄(うじよし)、松平近直、川路聖謨(としあきら)、井上清直、江川英龍(太郎左衛門)、ジョン万次郎などがある。

く、徴典館学頭、昌平坂学問所教授などを務めたが、36歳の折、有為の人物を求める阿部正弘にその才能を見込まれて目付に抜擢された。開国という大事業を行うにあたり作られた海防掛というブレインかつプロモーターのような集団の中でも、当初から彼は主導的な役割を演じて全体を牽引した。冒頭の福地桜痴の言によれば、「幕吏中にて初より毫も鎖国攘夷の臭気を帯びざりし」という存在であった。逆に言えば、人材は登用したが、海防掛の全部が最初から開国派であったわけではなく、またのちに共同する水野などは比較的保守的な勘定方の発想に近く、二人の政策感覚は夫々の司の性格により、必ずしも当初からピッタリ一致したものではなかった。しかしながら、救国特別タスクチームとしての海防掛は、「伊勢殿(阿部正弘のこと)の勤め申より、おのが思ひたる筋は心底を残さず理を尽くして議論に及ぶ」検討の上で、ペリーの再来訪後の事態急変に即応しつつ、開国へのコンセンサスを高めるべく、数々の意見書を発出していった。

彼の足跡は多岐にわたり、講武所、番書調所、長崎海軍伝習所の開設、品川砲台の築造などに及んでいるが、彼の構想の中心をなしたのは、国を開き貿易・交易を基本とする富国強兵論であった。これは、それまで「外国貿易とは、有用の品を輸出し、無用の品を輸入することによって国に大害をもたらす」というのが鎖国時代の貿易観であったものを、画期的に転換するものであった。また、政府だけでなく民間も、さらに幕府だけでなく各藩も貿易の利を共有すべしという理念を貫いた。具体的には、全国の主要港(江戸、大坂、兵庫、堺、下関、長崎など)に通船改会所兼物産会所を設置し⁵⁾、船ごとに取引高の2%の税をとり、海防、船舶・銃砲の製造、軍備・学術の費用、そして殖産興業の費用にも充てようというものであった。先に、同じ海防掛でも岩瀬と水野は必ずしも政策スタンスが一致していたわけではないと述べた。水野や川路聖謨などの勘定奉行系の人々は、貿易については「邪宗伝染を防止する鎖国こそが国家の元であり、貿易港は長崎に限

り、貿易はできるだけ小規模が至当」という意見書を上申し、岩瀬らと激しく対立した。前後するが、ハリスとの交渉が始まる前に、阿部は政務を分担し自らは国内問題に専念するため、老中堀田正睦を外務事務取扱(専任外相)に任命する人事をしている。堀田はもともと井伊直弼の推盤により老中となった身ではあるが、蘭学を好み、世界情勢にも明かかった。彼は、就任して諸役のこうした対立に接するや、吟味のうえ勘定方の意見を「固陋因循」として退け、開国派の政策に軍配を上げた。

阿部チームのブレイン中のブレインである岩瀬は、同時に優れた交渉プレイヤーでもあった。のちに述べるように、日露和親条約は一旦は水野らによって妥結するのであるが、外国嫌いの徳川斉昭の横やりで追加交渉をさせられることとなり、交渉メンバーの入れ替えに伴い布陣に連なったのが初陣。続いて、米国ハリスの応接掛に任じ、のちの蘭露英仏とのものを含め五ヶ国との通商修好条約のすべてに立ち会った。

一連の命を受け、高鳴る心情を託して吟じたのが次の詩句

汝知らず乎東方男子の国
男子の義胆堅きこと鉄に似たり

ハリスとの日米通商修好条約交渉には、井上清直とともに全権として当たった。テーブルに着くに先立ち、かねて下田に留め置いたままのハリスを出府させるか否かで幕閣は割れたが、岩瀬は「一大改革

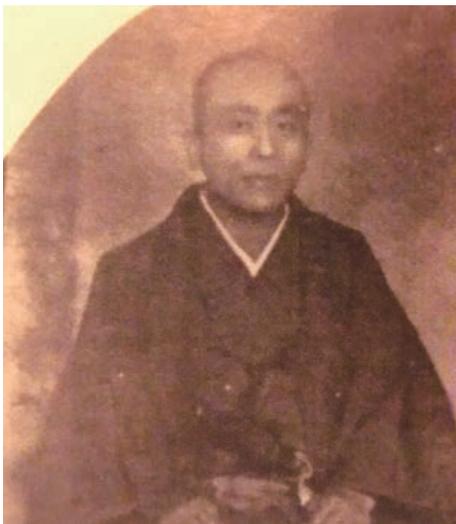


ハリス横浜上陸の図(横浜開港資料館HPより)

5) 岩瀬は浦賀の番所を横浜に移して会所を兼ねさせるとの提言もしているが、これは開港場所を横浜とするというのちの提案の伏線でもあった。その意味で、彼は今日に至る横浜繁栄の基礎を導いた功労者の一人である。

の政治を行わんには、外交の劇葉をもってするに若かず」と弁じたてて、ハリスの出府拜謁を実現させている。実際の交渉では、悲しいかな国際法についてのそもそもの知見不足から、領事裁判権⁶⁾、関税自主権のなさ、片務的な最恵国待遇など所謂不平等条約となり、後の明治政府に克服すべき重い外交課題を残す結果になったのは周知のとおりである。しかし、条約案の逐条に亘り綿密に論究しその是非を質す交渉ぶりは、ハリスをして「その論究はときに吾れを閉口させることあり。懸かる全権を得たりしは日本の幸福なり。日本のために偉功ある人々なり。」と言わしめるものであった。

かたや、水野筑後守忠徳についてである。彼は、旗本諏訪頼篤の子で、12歳で水野忠長の養嗣子(500石)となる。岩瀬と同じく阿部正弘に見いだされ、34歳で西丸目付に抜擢される。以後、使番、御先手組火付盗賊改方加役などを経て、外国対策に当たるため42歳で浦賀奉行、翌年には二回目のペ



水野忠徳像(茨城県鉾田市 大儀寺:本堂に掲げている子息と二人で写っている写真を、住職の奥様の許しを得て写させていただき、それよりトリミングした)

リー来航を見込んで満を持して長崎奉行に就任。もっとも、ペリーが下田に向かったため、これは目途外れに終わる。ただ、彼の出番はそれから。その後ロシアのプチャーチンが日露交渉のため長崎に来航し、大目付筒井正憲、勘定奉行川路聖謨を補佐して本格的に外交交渉に当たり、和親条約の締結にこぎつけた。その後、同じく長崎に来航した英国スターリングとも交渉して、日英和親条約を締結し、その功績を認められ勘定奉行兼勝手掛に昇進。その後、外国奉行として日英通商修好条約、日仏通商修好条約にも全権として調印している。

さらに経緯を経て、二度目に外国奉行となった折には、特筆すべき功績を挙げている。彼のチームは、長らく渡航が難しく領有が定かでなかった小笠原諸島の踏査、測量を敢行した。これにより、改めてここが我が領土であり我が国が保護することを、非日系の島民にも確認し、そして諸外国にも書簡で宣言して、小笠原諸島の我が国帰属が確定したのである⁷⁾。

また、オランダとの意見交換を通じて幕府海軍創設の献策を行うとともに、それに基づいて同国へのコルベット艦(咸臨丸、朝日丸)の発注にもかかわった。

このように記すと、業績に満ちた立派な外交官ぶりに思えるが、実は水野は二つの蹉跌を味わっている。一つは、のちに触れる通貨交渉。もう一つは攘夷派との戦い。難しい外交交渉などを通じて鎖国の継続の不可能さを身をもって感じた彼は、開国によるのではなく従来の延長線上の幕府立て直しを目指した公武合体論にも強く反対した。さらに、好漢血の気も多かった。1863年、当時大坂で身動きの取れなくなっていた将軍家茂の奪還と攘夷派の駆逐を画した実力行使(クーデター⁸⁾)にも主導的に加担し、その失敗により、即日謹慎処分となり、完全に政事の舞台から遠ざかることとなった。

6) 領事裁判権とは、事件に際し、外国人がその在留国において本国の領事により本国の法令により裁判を受ける権利をいう。そもそも三権が及ばない治外法権とは異なる。

7) 小笠原諸島の帰属については、文禄年間に小笠原貞頼(さだより)が統治し、以来幕府にもその領有承認を働きかけた経緯があるが、幕府からは長い間「打ち捨てられた」ような状態であった。しかし、ここにきて、捕鯨船が近海に往来し、英国、ロシアが海軍基地の建設を目論んだり、米国も関心を示して「三すくみの睨み合い」になってきており、対応は急がれた。その意味で、この時期の水野の着眼、行動は出色であった。かかる実効支配の宣言は、時の老中安藤信正の名のもと諸外国宛に通知された。

8) この事件は、文久3年(1863年)5月、京で人質に近い状況に置かれていた将軍家茂を救出し、併せて当時京の政局を主導していた尊王攘夷派を一掃するため、老中小笠原長行(唐津藩)が千数百名の軍勢で海路上洛を目指したものの。しかし、大坂に上陸するが、在京幕閣の猛反対にあい、家茂からも上洛を思い止まるよう命じられるに及んで頓挫(とんざ)。結果として家茂の東帰こそ実現したものの、計画自体は完全な失敗に終わった。一行には水野、井上清直(南町奉行)らが同行し、水野は一連の計画を首謀したとされている。爾後、小笠原も老中を罷免されている。

この時期の開国か攘夷かの構図を見るにある種の分かりにくさが伴うのは、将軍家の跡目争いと条約勅許が絡むからである。13代将軍家定を病弱として、早くからその跡目を紀州と水戸とで争い、結果紀州の慶福が14代将軍の家茂となるのだが、幕閣の人事と政策がその双方の駆け引きに左右された。岩瀬や水野の運命にも深く影を落としている。

一連の係争は、長らく幕政を主導してきた譜代大名を中心とした勢力と、どちらかと言えば幕政の中樞から遠ざけられてきた親藩大名や開明思想に触れた外様大名のグループとの間のヘゲモニー争いである。前者を南紀派、後者を一橋派と称した⁹⁾。概して言えば、南紀派は保守的な幕政改革を、一橋派は開国による急進改革を目指すものであるが、一橋派の筆頭徳川斉昭(前水戸藩主)は強硬な外国嫌いで知られ、話は単純ではない。

日米通商修好条約は本来すぐにも調印のはずであったが、徳川斉昭はじめ開国に懐疑的な諸大名の異論を封じるために、堀田は条約勅許を求めることとした。しかし、これが容易ならざる事態をもたら

すことになる。しかるべき手筈を整えての上洛ではあったが、形式的な通過儀礼で済むことを期待した堀田、岩瀬らは、攘夷派の公卿、更には孝明天皇の猛反対にあって、手ぶらで江戸に帰る羽目になった。かかる事態に至り、猶予ならざる四囲の国際情勢に鑑み、勅許を得ないで条約の調印を急ぐとともに、開国派の慶喜を将軍継嗣となして中央突破する覚悟を決めた堀田は、江戸参着後その布石とすべく、一橋派の松平慶永を大老にする旨将軍家定に言上した。ところが、堀田らの留守中に既に南紀派の画策に耳を貸した家定はこれを一蹴し、井伊直弼を大老に発令。これにより幕閣の雰囲気は一変。

堀田は直ちに登城停止処分に、そして二日後には老中を罷免されている。安政5年(1858年)6月正式に慶福の将軍継嗣が決まり、以後井伊直弼により順次「開明派」の粛清が行われた。水戸藩については、斉昭を永蟄居、慶篤を差控、慶喜を隠居並御慎み、家老安島帯刀を切腹などとした。時期が少しずれるが、岩瀬は日仏条約交渉終了を待って作事奉行に左遷のうえのちに永蟄居、水野も暫時役職に据え置かれたものの、ロシア海軍兵殺傷事件の不始末を咎められたこともあり外国奉行・神奈川奉行を罷免され閑職の西丸留守居役に左遷、ほかに大久保忠寛、永



岩瀬忠震(鷗所) 墓碑(東京都墨田区東向島 白髭神社：忠震は蟄居を申し渡されたあと向島に住み、43才で没するまで此処で書画三昧の日々を送った。明治16年に彼の旧臣白野某がその功績を記して建立。)



岩瀬忠震頭彰碑(愛知県新城市勝楽寺の境内。寺の裏手には設楽家の墓もあり、副住職の佐藤氏に案内いただいた。)



岩瀬忠震墓(東京都豊島区 雑司が谷霊園)

9) 南紀派は、井伊直弼(彦根藩)を筆頭に、松平容保(会津藩)、松平頼胤(高松藩)、松平忠固(ただかた)(信州上田藩)らがその主要メンバーであった。自らを蔑(ないがし)ろにされた将軍家定や徳川斉昭の乱脈素行を嫌悪する大奥もこれに組みした。一方の一橋派は、一橋慶喜を擁する徳川斉昭・慶篤父子(水戸藩)を筆頭に、松平慶永(越前藩)、徳川慶勝(尾張藩)の親藩大名や島津斉彬(薩摩藩)、伊達宗城(宇和島藩)、山内豊信(土佐藩)などの外様大名に、橋本左内、西郷吉之助なども組みした。阿部正弘が衆智を集めると称して諸藩の幕政への参画の道を開いたことは、後者の発言力の高まりと関係する。堀田正睦もこの派に好意的であった。

井尚志らが免職、永蟄居に処せられた。これで「海防掛」は壊滅。岩瀬、永井の永蟄居というのは、「閉門した上に一室に謹慎する」ことを終身強いることであり、幕吏としては非常に重い罪である。岩瀬は全ての身分を剥がれた後、江戸・向島に蟄居謹慎。岐雲園という別荘で書画に気を紛らわせつつ、文久元年（1861年）失意のうちに43歳で没している。

さて、岩瀬と水野の忘れてはいけない功績の一つに、通貨交渉がある。この事柄は、彼らの奮闘の事蹟であり、また結果において蹉跌でもあり、国としての苦痕でもあった。ここまでの記述の時間軸を一部繰り返すこととなり前後関係が分かりづらい面があり恐縮であるが、経済面に着目してその顛末を整理しておきたい。

日米和親条約（1854年）の肝は、二つの港を開くことのほか、日本に領事館を置くということであり、通商関係は日本に赴任した領事のその後の交渉に委ねられた。初代領事のハリスと幕府との交渉は難儀を極めたが、目に見える重大な経済インパクトがありながら、当時もその後も何故か評価の定まらないまま見過ごされてきた事項に、彼我の通貨交換比率問題があった。これは、当時の日本の金銀の交換比率と英米のそれとが異なっており、日本の交換比率が銀に偏重（金に比べ銀の価値が高く設定）されていたことに主な原因がある。

当時の外交使節団（米ハリス、英オールコック、仏ベルクールなど）と外国事務掛との交渉は、ある種珍妙でかつ深刻な紆余曲折を辿った。「拙者は大名である。これまで金銭のことなど扱ったことはござらん。左様なことは存じませぬ……。」当時外国事務掛老中であった間部詮勝がハリスに言い放ったとされ、外交筋でつとに有名となった台詞である。老中というのは、5-6万石から12万石くらいの譜代大名が任せられるが、もともと人材に制約があり、その中から担当として選ばれる外国事務掛も、世知

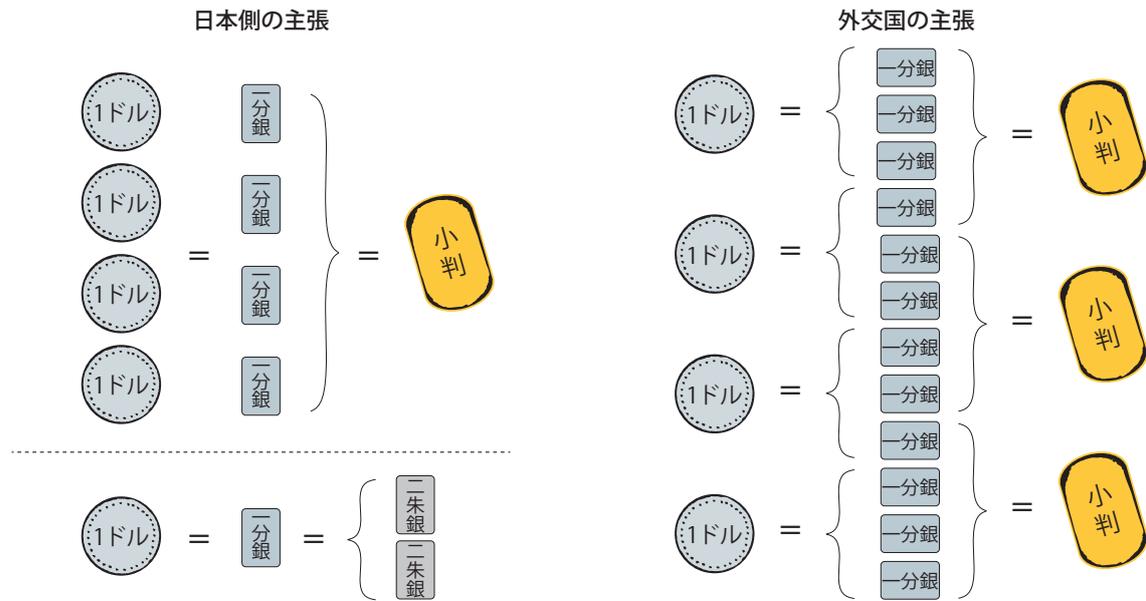
に疎く金銭感覚に欠けるだけでなく、外国との通貨の換算などその実を知らないというより、もともと無頓着。「担当の役人に命を下して適宜取り扱わせる」ことに何の不自然も感じていない。よって、交渉ではハリスらに直接対峙する我が国の高位折衝者は即応・即断できず、常に持ち帰り、「後日書面にて……」となり、一向に埒が明かなかつた。じりじりする外交使節は「裏で折衝者にいちいち知恵をつけ、小うるさい理屈を言い立てる岩瀬や水野などの輩が問題。彼らを除かん」と有形無形の圧力をかけた。そのため、度重なる外交団からの申し入れに抗しきれず事なかれの対応をする幕府上層部により、突然の担当替え（左遷）を強いられたり、交渉の場から当人が排除される事態にもなった。さりとて彼らなしでは折衝の会話が成立しないので、水野は交渉テーブルの後ろに立てた屏風の陰に潜み、逐一交渉者に指示をするようなことさえ余儀なくされた。「屏風水野」というのは、外交使節が苦々しく命名した彼のあだ名である。

肝心の争点であるが、彼我の主張を些か雑駁であることを覚悟で、一覧にしてみると図のようになる。要すれば、双方の主張する通貨価値には三倍の格差があった。また同時に、金銀の交換比率が内外で異なっていたから、一定のドルに対して多額の銀貨（一分銀）を入手して相対的に割高の銀を媒介にした内外価格差を活用すれば、通貨を内外で「横持ち」するだけで実に多額の純差益が生じた¹⁰⁾。現にこの銀貨の横持ちと国内での金貨へ交換を通じて相対的に安価な金の大量流出が生じた¹¹⁾。他方、国内的には、当時赴任した使節や立ち寄った船員が、ドルを国内貨幣に両替し国内の物資を購入するにあたり、彼らの相場であれば購買力が三倍になるという即物的効果があった。

紙面の制約があり、問題の詳細には立ち入らないが、この時我が国が展開した立論は素晴らしく近代

10) この間の外交使節団と幕府との通貨交渉については、佐藤雅美の「大君の通貨」に詳しい。当時の金銀の交換比率は、日本では金1gと銀5gが同値、一方国際的には金1gと銀16gが同値。即ち、横浜で銀5gを出すと金1gと交換できる。この金1gを上海で売ると銀16gが手に入る。その銀16gを横浜に持って帰ると金3g余となる。それを繰り返すと……、果てしない利殖が可能となる。そうだとすると、如何に銀貨（一分銀）を沢山手に入れるかが肝心。日本の1分銀の銀量はドル通貨（メキシコ銀）の1/3であった。仮に、同種同量交換を認めると、1ドルは3イチブ（1分銀3枚）となる。他方、日本は補助貨幣論に立って、1ドルは1イチブ（1分銀一枚）を主張。これで採（も）めないはずはない。しかも、どちらになるかによって、国内物価への影響は大きく異なった。

11) この時期に流出した金貨（小判）は、10万両相当に上ったとする記録がある。



通貨交換比率

的である。曰く「メキシコ銀貨は単なる地金であるが、日本の銀貨（一分銀）は責任ある政府が刻印を押しすることにより信用が保証されるのであり、確かに含有の銀量は少ないが通貨として問題はない。」要すれば、日本においては金貨（小判）を本位通貨とし、銀貨を補助通貨（代理通貨）として、当局の信用をもとに流通させているのだから信用に足るというもの。ところが、現代の管理通貨にも繋がるこの合理思考は近代的にすぎた。通貨同種同量交換のほかに発想が及ばず、しかも、そもそもの出自において怪しく、利に聡い西欧外交使節¹²⁾にはそんな理屈は受け入れられなかったし、受け入れるつもりもなかった。

もっとも、岩瀬、水野にしても、最初からこの補助貨幣・管理通貨の意味・実態を理解していたわけではない。通貨の同種同量交換はそれ自体におかしなところはない。しかし、実地に出向いた長崎での

取引実態などの見聞を通じて、仮にこの交換比率を認めると国内物価の高騰、自国民の疲弊を招き大事に至ることを悟った後は、従来の軸をブラすことなく、猛然と巻き返しに出た。

政局のあおりで途中から職を離れた岩瀬に替わって交渉の責任者となった水野は、局面打開のために二朱銀なるものを編み出した。これは銀量を増量して銀貨としての価値を高め、もって、「1分銀＝2二朱銀＝1ドル」の相場を再度誘導せんとする新対策であった。しかしながら、思考停止で肯じえないの当時の外交使節の強硬な拒否にあい、早々に撤回を余儀なくさせられた。さらに、ハリスとの条約が締結を急がれ、阿部正弘のあとの老中首座に就いた堀田正睦は、そのため外交団の主張を入れ、批准の要らない協約の中で同種同量交換の条項を受け入れるという妥協に転じた。

こうした動きに対し、水野は「正しいあるべき通貨を発行するのに外交使節の了解など取り付ける必

12) 前述の「大君の通貨」によると、交渉中暫定的にはあるが外交特権として、領事館員の生活維持のため、或いは開港時期の延長交渉のための懐柔策として、月々に彼らには外貨から一分銀への一定額の両替を認めていた。当時のハリスの米国政府からの年俸は5千ドルと言われている。時々相場にもよるが、この両替用に割り当てられた一分銀を「右から左に」換金するだけで年9千ドル相当の利益を生んだとされる。こうした利得を生む特権を前にして彼らがどう行動したかは想像に難くない。通貨の交換比率問題はずるずると引き延ばされた。ただ、さすがにこうした彼らの行状は横浜の同国人の間で、また母国や香港のメディアで悪評となり、ハリスもオールコックも早々に帰国・退散を探らざるを得ない状況となった。もともとハリスが本当に敬虔な聖公会信徒であったかどうか、厦門(アモイ)の外科医崩れのオールコックにどれほどの正義感があったかなどということを論(あげつら)うつもりはないが、例えばハリスの後任として赴任したプリュインはのちに幕府の艦船買付前渡金を横領するという事件を起こしていることだけ記して、当時の「西欧外交使節」の質を思い知る材料としたい。

要はござらん」と言い募り身体を張って抵抗したため、遂に堀田から罷免されてしまう。のちに水野は井伊直弼により新設の外国奉行¹³⁾の一人に据えられたが、既に発生した物価の高騰は市民生活に甚大な被害をもたらしていた。

その後時節は移り、その大老井伊直弼が桜田門外に斃れ¹⁴⁾、そのあとの安藤信正も坂下門外で負傷・失脚した。新体制で政事総裁職に就いた松平春嶽の方針（公武合体論）に反発した水野は、外交担当から外され函館奉行に左遷されそうになったため、遂に自ら隠居。癡雲と称した。その後、攘夷派との抗争加担の責任を問われて、改めて蟄居させられたのは前述の通りである。しかし、彼は通貨交渉当事者として、通貨事案の真相を悟り、交換比率次第では物価高騰、財政収入の減少（改鑄差益の喪失）など国家、自国民への甚大な悪影響が生じるのを予見で

きる立場にあった。それだけに、不遇のうちに国内の混乱を見つつ晩年の日々を送る水野の無念・悶絶の心情は察するに余りある。記録には、明治元年（1868年）に「病に罹り憤死」とある。享年58歳。

賢明なる読者は既にお気づきとは思いますが、こまめで本稿を含め本誌で取り上げてきた幕末に筋目を通した硬骨の士には、全てその名前に「忠」の字が含まれている¹⁵⁾。意図的にそうした人ばかりを選んだわけではないが、顧みてある種の感慨がある。「忠」は平たく言えば、「偽りのない素直なまごころ」とでもいうのであろうが、儒教的な徳目の中では格別なものがある。『礼記』曲礼篇には、父が過ちをした場合の子の対応を「三度諫めて聞かざれば、すなわち号泣してこれに随う」とされ、これに対して、君が過ちをした場合の臣の対応を「三度諫めて聞かざれば、すなわちこれを逃る」としている。儒教的世界では、この国家と家族（私）との関係は、「忠孝一致」のそれとは異なり同心円的に重なるというより、2つの中心を有する楕円構造という方が分かりやすい。したがって、双方には緊張関係があり、とりわけ国家観の錯綜する中であっては、往々にして旧来の柵に囚われがちな周辺と個（私）との軋轢は避けられない。幕末を描いた著述には膨大なものがあるが、著者としては、大変革の時代に名前こそ膾炙されていないかもしれないが、其々に「忠」を貫いて秩序を支え、今日の我が日本の礎を築いた幕末好漢の生き様を、限りない尊崇の念を以って描いたつもりである。



水野忠徳墓（左 東京都中野区 宗清寺、右 茨城県鉾田市 大儀寺：大儀寺には遺髪だけが祭られてある。）

- 13) 外国奉行という聞こえは良いが、この段階での新ポストは、海防掛のような政策企画の機能は期待されず、既にいくつか実績を積んだ外国との条約交渉専門技術者という位置づけにすぎなかった。
- 14) 井伊直弼が桜田門外に襲撃された最大の原因は水戸派との確執である。しかし、日米通商修好条約の正式締結時期は彼が大老になった後であるため、もともと開国には積極的でなかった彼が、勅許を得ずして条約を締結したことを違勅とされて弾劾されることになったのは、ある意味皮肉である。条約締結交渉に当たって、彼は岩瀬に対し時間をかけるよう指示したが、英の対中武力強硬策などを引き合いに、「機を測り、万やむを得なければ調印も可とする」との言質をとった岩瀬の作戦勝ちであった。
- なお、余談であるが、此处でいう英の対中武力強硬策というのはアヘン戦争その他のことを指すが、この時期の欧米諸国が日本をも対中国と同じように処すことが本当に可能であると考えていたかどうかには諸説ある。さすがに当時の英国議会でも、自国の対中政策についてはこれを訝（いぶか）しく評する論調が支配的であり、対日対処方針は過激ではなかった。後発の米国でも、憲法の制約（武力行使＝宣戦布告の権能は議会にしかないこと）もあり、大統領フィリップからの交渉者へのマンデー付与は発砲厳禁が大前提であった。ペリーは来航に際して、巨大蒸気艦船をできるだけ多く動員することに拘（こたわ）った。発砲ができない以上、艦隊の偉容だけで「威圧する」しかなかったのである。余談ついでに、ペリー提督の起用についてのエピソードを一つ。当初米大統領の命を受けて日本開国の任務を与えられたのは、ジョン・オーリックという東インド艦隊の司令長官であった。実際彼は中国までは艦隊を率いて到達している。ところが、彼は旗艦サスケハナ号の艦長と悶着（もんちゃく）を起こし、突如更迭され、来航直前にペリーに交代させられてしまった。したがって、ひょっとしていたら我が国の歴史教科書に名前を刻んだのはペリーではなく、オーリックだったかもしれない。
- 15) 小栗上野介忠順（ただまさ）、林昌之助忠崇（ただたか）、酒井忠発（ただあき）・忠篤（ただあり）、岩瀬忠震（ただなり）、水野忠徳（ただのり）……彼らの想いは素直、真つすぐであるが、その名前の「忠」以外の部分の読みは、何故かしら平易に読みやすいとは到底言えない（苦笑）。